●エッセイ

私のルーツ、萩尾まんが

折原みと

私のまんが家としてのルーツが、萩尾望都だと言ったら、萩尾ファンの失笑をかうだろうか？

この本を読んでいる萩尾ファンが、折原みとのまんがを読んだことがあればの話だが、この超ブリブリフツーの女の子向け恋愛少女まんが家（自分でゆーかな？）の私が、実は萩尾望都の影響を受けていたとは誰も信じないだろう。

とはいえ、誰も信じてくれなくても、本人だけは信じている。

私のルーツは、断じて〝萩尾望都〟にあると！

私が萩尾まんがと出会ったのは、小学校5年生の頃、第2次反抗期を迎え、ようやく自我に目覚めた頃だった。

それまでの私といえば、親の言うことをよく聞く素直でおとなしい〝よい子〟。

それが、どういうわけか突然屈折したらしく、急に〝人生とは〟〝愛とは〟〝死とは〟…とかって、わかりもしないのに真剣に考えはじめたのもこの頃だ。

自然、読書傾向も変わった。
それまでは児童向けの童話や世界の名作子供文庫を読んでいたのが、いきなり哲学書やら自殺した青年の手記なんてものばかり読むようになった（ちゃんと理解していたかどうかは疑問だが）。
まんがも、それまでの「マーガレット」や「フレンド」、「りぼん」、「なかよし」路線から、「少女コミック」系統に変わった。
今はどうだかわからないが、私が小学校5年生当時の「少女コミック」は、他の少女雑誌に比べて少しマニアックだった。
それまでまんがといえば『ベルばら』『エースをねらえ！』『はいからさんが通る』と来た私は、そこでいきなり萩尾望都や竹宮惠子、大島弓子のまんがに夢中になったのだ（とはいっても並行して『キャンディ・キャンディ』も読んでたけど）。
私が小5から中1くらいまでの3年程だから、一九七四年から七六年くらいまでの間だろうか。
当時の「別冊少女コミック」は、まさに古きよき〝黄金時代〟だったような気がする。
萩尾望都の『ポーの一族』が掲載されていたし、竹宮惠子が『シルベスターの星から』や初期の『変奏曲』シリーズのような、まだ煩悩（ぼんのう）にはしりすぎていない（あっ、ごめんな

さい）作品を発表していた。
大島弓子の読み切りも好きだったし、名香智子の『美女姫シリーズ』も好きだった。
吉田秋生もこの少し後のデビューだったろうか？
けれど、それからしばらくすると、なんだか「別コミ」にも、フツーの恋愛まんがが増えてきたような気がして、つまらなくなって買うのをやめてしまった。
「週コミ」を毎週買う程お金がなかったので、萩尾望都のまんがも読まなくなってしまった。
高校生になって、「プチフラワー」あたりで再会した時には、何だか絵も話も、以前より大人びてしまったように思えて、昔ほど夢中にはなれなかった。
小5の頃、やっと自我に目覚めた私は、〝フツーの子〟であることがいやで、フツーよりマニアックなものに魅かれた。
けれど、しばらく〝フツーじゃない子〟をやっているうちに、あえて〝フツーじゃない子〟になろうとすることが実はとっても〝フツー〟だったということに気づき、今度はどっから見ても〝フツー〟なことのほうが、かえってカッコいいように思えてきた。
ことさらに〝フツー〟になろうとした私は、マニアックなものを意識的に避け、いつのまにか、萩尾望都のまんがからも遠ざかっていた。

昔あれ程ハマっていた『ポーの一族』や『トーマの心臓』を読み返したのも、少女まんが家としてデビューして数年たってからだ。
けれど、久しぶりに読み返してみて驚いた。
似ているのだ。
萩尾望都のまんがのセリフまわしと、私のまんがや小説の文体が…だ。
と言うと、「どこがだ!?」と罵声が飛んできそうだけれど、自分にはハッキリわかる。
一応韻(いん)を踏んで、リズミカルにと心がけている私の文体は、まちがいなく、萩尾望都の影響を強く受けているのだ。
思えば、私が萩尾望都作品に心酔していた年頃は、ちょうど思春期で、一番心がやわらかい時。
その頃に1ページ1ページなめるようにスミズミまで読んだ萩尾望都のまんがは、確かに、私の人間性の一部や、作家としての基礎の部分を形づくってくれたはずだ。
それに気がついて以来、雑誌のインタビューなどで、「影響されたまんが家は?」と聞かされると、必ず「萩尾望都先生」と答えているのに、みんな「へえー、意外ですね」と疑わしそうな顔をするのがちょっと悲しい(そりゃ、似ても似つかないモンを描いてるけどさ)。

それにしても今にして思えば、萩尾作品に夢中だった小5から中1くらいの3年間は、私の人生の中で、最も感性が鋭くて、物事を真剣に考えていた時期だったような気がする。当時の萩尾作品を読むと、その頃の純粋さの、何分の一かでもよみがえってくるような気がするので、今でも時々、真夜中にシミジミ読み返したりする。

『トーマの心臓』を読んだのは、小学校の卒業式の日だった。

ちょっとひねくれていた私は、クラスメイト達が泣いてる時も、ひとりだけシラっとしていたのに、学校帰りに買った『トーマの心臓』のコミックス3巻をまとめ読みした後、せきを切ったように涙があふれた。

ユーリが神学校へ旅立って行くラストシーンに、ようやく自分自身の〝卒業〟と、友達との別れを実感したのだ。

『ポーの一族』のアランが死んだ時には、友人とバラの花を買って、学校の裏庭でお葬式をした。

今思えば大笑いのはずかしいエピソードだが、その頃の私は大マジメだった。

萩尾望都のまんがは、私の作家としてのルーツというだけでなく、愛おしくもなつかしい、少女時代の真剣な自分を思い出させてくれる〝聖域〟なのだ。

ところで、今回の『訪問者』の主役でもあるオスカー少年だが、『トーマの心臓』での

成長した彼は、萩尾作品の中で、私の一番好きなキャラクターだったりする。
白い髪（白髪(しらが)ではなく）で女顔でクールで包容力のあるおにーさんぽいワキ役キャラ
私も時々作品の中に登場させてしまうが、そのモデルが実はオスカーだと言ったら…。
やっぱり、誰にも信じてはもらえないだろうか？
大先輩の諸先生方、文中、敬称略の失礼をお許し下さい。

折原みと

一月二七日、茨城県石岡市に生まれる。みずがめ座、血液型はB。少女まんが家・ジュニア小説家。八五年にまんが家デビュー、八
年『夢みるように、愛したい』で少女小説に進出、以後、両分野で
大活躍を続けている。代表作に、映画化もされた『時の輝き』のほ
か『たくさんの天使たち』『真夜中を駆け抜ける』などがある。